

冬の終わりに原発事故避難指示区域(帰還困難区域)を縦断した。この7年で指示解除が進み、今の避難指示区域は事故直後の1/3近くの面積となっている。そこを通る常磐自動車道と国道6号線が3年前に開通、一般車も通行可能となり南北がつながった。まだ歩行や2輪車での通行はできない。

それは冬の始め、宮城県蔵王の山荘に招待されたことに始まる。山荘は14年前に完成。広島出身のクライアントは当時シンガポール在住で、今は都内に住む。懐かしさに14年分の話に花が咲いた。今回、夫妻は原発事故避難指示区域を通る国道6号線を通して来たと言う。彼は「誰も住んでいない地域になってしまった……」と嘆き、酔いの回った僕らは感傷的になり無力感に囚われた。そして福島に住む自分が、その縦断をしてないことに気付き恥ずかしくなった。それまで北と南から避難指示区域に接触はしたが、縦断の経験がなかったからだ。

3カ月後、いわき市から北を目指す。ここ福島市から自動車道で120kmのいわき市は、浜通り一のまちで避難指示区域からの移住も多い。自動車道では県内各地の仮置き場から原発事故の周辺にある中間貯蔵施設に除染土を運ぶトラックを見かける。震災後いわき市で幾種かの仮設建築の設計をし、今も一般住宅の工事が進んでいる。この日は午前中現場状況を確認、午後一番に発ち国道6号線を北上した。良い天気、空が青く高く綺麗だった。

いわき市から出ると東京電力広野火力発電所、東京電力他出資施設のJヴィレッジ、4基の原子炉停止の東京電力第2原発、原発事故を起こした東京電力第1原発が続く。6号線の交通量は多く朝晩は渋滞になるという。特に原発、除染、地震・津波などの復興工車の車両が目立つ。帰還困難区域へ入る直前、4年前に訪れたJR



浪江町の牧場

福島

記憶と教訓の道

帰還困難区域国道6号線と114号線をたどる

遠藤知世吉
えんどうちよきち
遠藤知世吉建築設計工房

常磐線富岡駅に立ち寄る。当時は津波で流された車も家も手つかずで荒れ放題だったが、見違えるほど整備され、コンビニやホテルまであり驚いた。しかしここから先は浪江駅まで不通のまま。

帰還困難区域は国道両脇がバリケードで囲われ、主要ゲートではガードマンが車の出入りをチェックしている。

2014年6月撮影富岡駅



2018年2月撮影富岡駅

交通量が多く車を停める場所もなく、1人ではそこでの写真撮影は難しい。バリケードが終わると国道を離れ海沿いに向かう。そこには津波に耐えた二本の松がまっ直ぐ立っていた。近くでは堤防工事が行われ、除染土の仮置き場があり、仮囲いには「故郷小高にお帰りなさい」の文字。二本の松が工事を眺めているようだ。南相馬市から国道144号線に向う。途中に牧場があり数十頭の牛が放牧されている。そこには「決死救命、団結! ふくしま希望の牧場」ののぼりが立つ。牛を眺めると夕暮れを迎えた。

浪江町内国道144号線沿いも帰還困難区域。人家に明かりはなくバリケードに覆われている。144号のいくつものトンネルを走っていると、7年前この道を避難した浪江町の方々の心細さがわかるような錯覚を覚える。19時福島市に着く。

時はいろいろな出来事を忘れさせる。しかしこの160kmの道はそれを思い出させる。離れ行く人との別れ、応援に来た人との出会い、がむしゃらだった仮設・復興建築業務、不安や希望そして怒り。「原子力明るい未来のエネルギー」とされた原発。人がそこに住むとは? 幸せとは何だ?……。7年間の出来事や思いが一気に押し寄せてくる。この道はそんな「記憶と教訓の道」だった。



福島県・原発避難区域縦断道路・筆者作成